

ただ今、 道産子修行中!

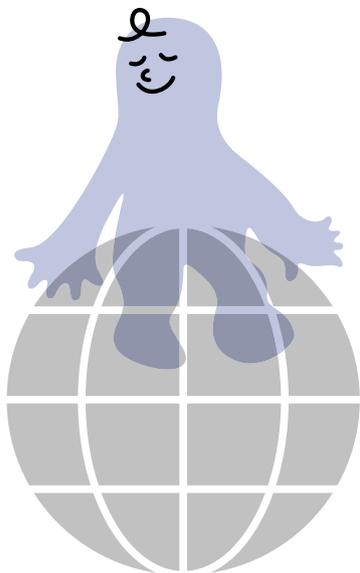
まさごのりこ北海道魅力発見録

～その3～

海外武者修行報告

真砂 徳子

フリーアナウンサー



先月、1カ月に及ぶ「きんよく」生活を送った。場所はイギリスのロンドン。2012年には夏期オリンピック大会も開催される、言わずと知れた大都会だ。そんな刺激いっぱいの大都会で、欲望を抑えねばならぬとは、いったい何の罰ゲームかと思われそうだが、「きんよく」とは「禁欲」にあらず。「禁浴」、正確には「禁入浴」である!

私の滞在したロンドンの家庭では、「禁浴」は特別な理由からではなく、ごく当たり前のことであつた。居候の私同様、家族全員が「シャワーは1日15分まで」と決められ、洗髪も3日に1度くらいの割合で、ドライヤーの使用頻度も少ない。洗濯だって週に一度。冷くなった料理はオープンの余熱で温められていた。そして使用しない電化製品はコンセントまできっちり抜いての節電。経済の節約はもちろんだが、省エネの心がけは、とにかく徹底していた。それに引き換え、日本での私ときたら、バスタブたっぷりのお湯につかる事が何よりも楽しみで、日々の入浴時間は優に2時間を超えている。ホストファミリーに「お風呂が趣味です」なんて、申し訳なくて、とてもじゃないが言えなかった!

以前、日本人のぜいたくな暮らしを表した数字を目にして驚いたことがある。世界中の人たちが日本人と同じ水準の生活をする、なんと地球は2.4個も必要だというのだ!これは、食べ物を得るための田畑や海面、石油や石炭を掘る土地、住居や公共施設を建てるための土地等、一人の人間が地球上で暮らしていくために必要な土地の面積を合計した「エコロジカル・フットプリント」と呼ばれる概念で計算されたもので、日本人一人当たりが必要とする空間は4.3ヘクタール。日本の国土と領海を人口で割算すると0.8ヘクタールしかなく、一人当たり3.5ヘクタールも足りない。私たちの暮らしは、海外の土地で生産された食糧や、食べ物も水もろくに口にできない餓死寸前の人たちの犠牲によって成り立っているという事が一目瞭然なのである。ロンドンでは、「日本人の習慣だから」と、私だけ特別に朝シャンを許されていたが、日本人のぜいたく癖とあきらめでの言葉だったかもと考えると、自分の振る舞いに、ああ、赤面…

一方、今、地球が抱える環境問題を改善すべく、ある日本の言葉をキーワードにした一大キャン

ペーンが展開されていると聞いた。提唱者はワングリ・マータイさん。ケニアの環境副大臣を勤める女性で、「グリーンベルト運動」と呼ばれる植林事業により、2004年にはノーベル平和賞を受賞した環境活動家だ。そんな世界的にも有名なエコロジストが注目したのが「MOTTAINAI」、そう、あの「もったいない」である。マータイさんは、この言葉にこそ、環境問題に役立つ大切な精神が込められている、と力説しているようだ。

私たちのご先祖様は、確かに、この「MOTTAINAI」を実践していた。時は江戸時代。江戸のまちでは、「リサイクル (Recycle)」が産業として成立していたという。提灯や傘の張り替えといった、現代では、壊れたら捨ててしまうようなモノの修理をする「職商人 (しょくあきんど)」は、必要に応じて新品の販売や古物の下取りをする商人でもあった。「鋳掛屋」や「瀬戸物の接ぎはぎ屋」は台所用品や食器を修理する専門業者で、モノの多少の破損は、彼らが解決してくれたそうだ。「紙くず買い屋」、「肥汲み屋」、「ろうそくの流れ買い屋」等は、拾い、買い集めたモノを、それぞれ再生紙として、肥料として、新しいろうそくとして販売していた。また江戸のまちには、1000軒以上の古着屋と600軒以上の貸本屋が軒を連ねていたようだ。同じモノを何度も繰り返し使う江戸のまち。こうなると、ゴミ拾いは宝探しになる！？

「アイヌの人々は春の土用になると、オヒョウ (楡) の皮を剥ぎ、沼や温泉に浸してから、紡いたり織ったりしてアトウシを作る」

これは北海道の名付け親で、江戸末期から明治にかけて北海道を探検した松浦武四郎の「蝦夷漫画」に書かれたアイヌの人たちの衣服の記録である。食糧については「この村辺に住む人々は、多くは菱の実を食料として暮らしている。4月にはどのような草でも食料になる根を掘って貯えるので、樺太では4月はシンリツ (根) と呼ぶのである」、住居は「西蝦夷地では、多くは笹の葉で屋根を葺いている」と記されている。当時、北海道で営まれていた「衣食住」の材料は、空に太陽がある限り何度でも再生できるリニューワブル (Renewable) な素材だったのだ！

まさに「温故知新」。昔々の暮らしぶりには未来へのヒントがいっぱいなのである。

ところで、2000年の歴史を誇るロンドンでも、あちらこちらで再利用の光景に出会った。古い建物は観光名所の歴史的建造物だけではない。一般住宅やテムズ川沿いのおしゃれな施設が、数世紀前の建物を改装し再利用されている。週末に開催される古物を売る市場には、いつも驚く程沢山の人が詰めかけ、皆がアンティークの食器やジュエリー、時計の愛らしさに見入っていた。しかし、私が散歩から帰宅すると、町に充満している自動車の排気ガスのせいか、鼻の穴の中は毎日真っ黒。地下鉄には、夜遅くまでファーストフードを片手にたむろする肥満体の若者があふれていた。その様子はモノを大切にす文化とあまりにもチグハグで、かえってドキッとさせられた。

イギリスからの帰途は十数時間の長距離飛行であったが、着陸直前には、空の上から見る北海道の広大な新緑の原生林に、疲れも忘れ、思わず見とれた。そして新千歳空港に降り立ち、さわやかな空気を胸いっぱい吸うと、長時間狭い座席に押し込まれコチコチに固まっていた体が徐々にほだけて行くような安堵感に満たされた。広い空と大地と緑と美味しい空気。ロンドンでは味わえなかった北海道のだいご味だ。「禁浴」「省エネ」「MOTTAINAI」…。異国で巡らせた想いの多くが、改めて北海道の環境が貴重であることを知らせてくれる。「環境問題？私一人が頑張ったって…」なんて言うのは、もうやめよう！だって、いつまでもきれいな北海道に住みたいもの。道産子修行9年目。北海道の魅力再認識と謙虚な気持ちを教えてくれた海外武者修行報告でした。



profile

真砂 徳子 まさこのりこ

フリーアナウンサー。

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設した。<http://www.masagonoriko.com/>